

地域高齢者における社会的交流頻度と精神的健康との関連について
 ○三宅基子、木村みさか（京都学園大学健康医療学部）、亀岡スタディグループ

本研究の目的は地域高齢者の社会的交流が精神的健康に及ぼす影響を検討することである。2012年亀岡市在住の65歳以上高齢者を対象とした調査データを用いて分析を行った。分析対象者数は8272名である。家族および友人との交流頻度別に高交流群・中交流群・低交流群の3群に分けた。精神的健康度としてGDSおよびWHO-5のスケールを用いた。性別、年齢別に交流頻度の違いをカイ二乗検定を用いて、また交流頻度別のGDSスコア、WHO-5スコアの差を分散分析を用いて分析を行った。高交流群は女性40.7%、男性37.1%と女性の方が有意に高値を示した($p < 0.001$)。年齢別では、高交流群は70歳代(37.1%)が最も高値を示し、低交流群は90歳以上が52.8%と高値を示した($p < 0.001$)。WHO-5スコアを比較した結果、低交流群 50.37 ± 23.69 、中交流群 60.07 ± 20.75 、高交流群 66.67 ± 18.21 と交流頻度が高い群が有意に高値を示し($p < 0.001$)、逆にGDSスコアは、交流頻度が高い群ほど有意に低値を示した(7.16 ± 2.11 , 6.61 ± 1.91 , and 6.28 ± 1.69 , $p < 0.001$)。これらの結果から、高齢者が他者との交流をより多く持つことが良好な精神的健康に関連していることが明らかとなった。

高齢社会の世代間交流活動のあり方
 ～多世代交流のツールとしてのカルタづくりから～
 ○須賀由紀子〔実践女子大学〕 酒巻由佳〔日野市役所〕
 キーワード：高齢社会 世代間交流 サードプレイス

地域コミュニティの中で多世代交流を促進し、豊かな社会関係資本を培っていくことは、少子高齢社会の主題の一つであり、地域に「誰にとっても居心地の良い場（サードプレイス）」を生み出すことは行政にとっても大きな課題となっている。様々なレジャー・レクリエーション活動はその大切な役割を果たすが、高齢化率がますます高まる中、どのような場づくりが望まれるか、その指針を行政としても得ておくことは必要ではないか。

このような問題意識を背景に、本研究では、大学生が高齢者に対して、どのようなイメージを持っているのかという観点から、世代間交流に望まれる場のあり方を検討し、地域づくりの指針を探った。方法として、イメージを端的に言葉で表すことのできるカルタづくりという手法を取った。具体的には、大学生に「こんな高齢社会になってほしい」という願いを込めたカルタの読み札案を考案してもらい、その言葉を分類することを通して、望まれる世代間交流についての類型化を試みた。そして、類型化されたキーワードをもとに、高齢者と若い世代との間の交流を深めるための活動のあり方を検討した。その結果、高齢者の「孤」の時間を、「共」の居心地よい場とする際の指針が見出された。